

◆ セミナー ◆

日本とタイの仏教交流の諸側面 (1)
スリランカ=タイの上座仏教と日本仏教

2018 年 7 月 20 日(金)15:00~18:00

龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室



会場の様子

(龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室)

◆ セミナーの概要 ◆

2018年7月20日（金）、藤本晃氏（浄土真宗誓教寺住職）による講演「スリランカ＝タイの上座仏教と日本仏教」が行われた。

まず藤本氏は、「交流」とは「何かと何かが接触して新しい何か（認識）が生じること」であり、また「刹那生滅して止まらない諸現象が触れるたびに滅して、新たな現象が生じること」だと定義した。そして「分裂」とは、このような「交流」を閉じるものであると述べた。その上で、藤本氏は、スリランカにおける部派分裂（大寺派、アバヤギリ派、ジ

ェータヴァナ派)の歴史について解説した。

次に、スリランカとミャンマー、タイがどのように「交流」を行ってきたかが述べられた。19世紀には、スリランカの比丘サンガで出家できない若者がミャンマーのアマラプラで出家して帰国した。彼らはアマプラ派と呼ばれている。またミャンマーの森林比丘の流派で出家して帰国する者もあり、彼らはラーマンニャ派と呼ばれている。藤本氏は、これは部派分裂ではなく、同じ上座部(大寺派)の比丘サンガであり、国やグループによって文化的な相違こそあれ、破和合僧ではないと述べた。

日本仏教は、上座仏教と「交流」を行っているだろうか。――藤本氏は、日本の仏教学界は「禪定」「悟り」など実証を要する学や「縁起」「無常」などの理解は行われていないのではないかと疑問を呈した。また特に学界では、仏法僧の混同が行われており、これらの区別をしっかりとしなければならないとも主張した。



藤本晃氏
(浄土真宗誓教寺住職)

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔